



駒本の力

駒本小学校（家）

教育活動紹介便り

NO. 31

平成28年9月20日

自分にはできないとあきらめてしまう心の壁

校長 田中 克昌

ブラジルのリオデジャネイロにおいて9月7日からパラリンピックが始まりました。パラリンピックとはもう一つのオリンピックという意味です。障害のある人たちのオリンピックです。パラリンピックのシンボルマークを紹介します。下の図がそのシンボルマークです。これは、「スリー・アギトス」と呼ばれています。アギトスとは、ラテン語で「私は動く」という意味だそうです。青・赤・緑の三色は、世界の国旗で最も多く使用されている三色ということで選ばれました。中心を取り囲むように位置する三色の曲線は「動き」を象徴したもので、いろいろな意味が込められています。

このスリーアギトスは、常に前進しあきらめない強い意志を表現しているそうです。障害というものは全ての人の中にあります。それは心身の障害だけではありません。その最大のもは、「自分にはできないとあきらめてしまう心の壁。」なんだそうです。

私たちは、パラリンピックを通して、身体にどんな障害があろうとも、自分にはできないとあきらめずに挑戦し続ける人たちが世界中にたくさんいらっしゃることを知り、その姿から、自分にはできないとあきらめずに努力し続けることの大切を学んでいきたいと思っています。



パラリンピックの卓球の選手で、両手に障害があり、ラケットを口にくわえてプレーしている選手がいました。私は、大きな驚きを感じると共に、その方が歩んでこられた人生の重みと、困難にチャレンジし、自分にはできないとあきらめずに努力し続けてこられた姿に感動しました。きっと、私には創造できないほどの苦しみや困難があったことでしょう。その困難を一つ一つ乗り越えることは、本当に血が滲むほどの努力と心が必要であった

と思います。また、その方を支えてこられた家族や周囲の方々の努力にも敬服します。自分がしなければならないことで、もう自分にはできないとあきらめてしまっていることの多さを反省するとともに、とにかく半歩でも前に進んでいこうという心をもたなければならないということを学びました。

駒本の力【1年生】

どの学年も運動会に向けて頑張っているのですが、今回は、駒本の力【1年生】として、1年生の子どもたちが日常の生活で身に付けてきている「力」を紹介します。

① 挨拶がんばり隊

今月は、1年生と6年生が挨拶頑張り隊の担当なのですが、6年生は朝練等で忙しく、1年生が中心に頑張ってくれています。どの子もしっかりとした声で挨拶をしてきています。これだけでも、駒本小の1年生のすばらしさがよく分かります。そんな中で、ある子どもたちが私に話してくれました。「校長先生、たくさんの人とあいさつするのはとてもたいせつだね」「笑顔であいさつすると、気持ちがいいねえ」と言うのです。びっくりしました。1年生の子が、こんな素敵な思いを言葉に表すことができるのですね。1年生は教室に行っても、廊下ですれ違っても、どの子も元気にしっかりと挨拶してくれます。駒本の力として自慢の1年生です。

② 給食では

1年生の教室が校長室から近いこともあって、よく給食の時間にお邪魔することがあります。お邪魔した時には、「今日の給食はおいしい？」と聞くと、きまって「おいしいです」と返ってきます。さらに、「校長先生もみんなと一緒に食べてもいいですか？」とお願いすると、「いいよ」「ありがとうございます。」という言葉が返ってきますし、私が座る椅子の用意までしてくれる子がいます。本当にうれしくなります。

③ 授業では

先日、1年生の先生が午後に出張されるということで、1年生の教室に補教（担当に代わって授業を受け持つこと）に行きました。ひらがなのプリントや算数のプリントを行ったのですが、プリントを配布するときに、「どうぞ」と声を掛けると、「ありがとうございます。」と言い、次の人に「どうぞ」と渡していました。また、「1枚できたら○をつけますので、校長先生の所に来てください」と伝えると、どの子もきちんと私の前に静かに並んで、「お願いします」と言って、プリントをこちらに向けて差し出します。○をつけてあげると、「ありがとうございます。」と言って受け取り、自分の席に戻り次のプリントに取り組みました。プリントが全部終わると、静かに読書をしていました。

このように駒本小の1年生はすばらしい力を身に付けてきています。これには、担任の先生方の指導力がかかせません。一つ一つを丁寧に根気強く、獲得できるまで指導する愛と熱と力があってこそのことです。また、1年生という年齢から、心の中の素直さを十二分に表に出させることも重要です。いつもお伝えしているように、「素直さは伸びるコツ」なんですね。1年生の大きく伸びていきたいという高い意欲と、みずみずしい若枝のような素直さが、とてもまぶしく素敵に感じました。